

『学問の進歩』

フランシス・ベーコン著、服部英次郎、多田英次訳／岩波文庫

大学の勉強は、高専や高校と違って授業内容を疑うことから始めてほしい。大先生といえども、間違えることはある。地動説しかり、アトム論しかり、製造不可能と言われた青色発光ダイオードしかり、枚挙にいとまがない。画期的研究とは常識や権威を疑うところから始まるといってよいと思う。

このことはフランシス・ベーコンによって警告が発せられている。彼については、歴史の嫌いな人にとっては記憶の彼方に飛ばしてしまっているかもしれないが、一応高校・高専の一般科目で人名ぐらい習っているはずである。一般的には16世紀から17世紀にかけてイギリスで活躍した哲学者としてのほうが有名だが、のちに大法官を務めている。当時のインテリ層は、当然哲学を学び社会的地位のあるものは国民のために働いたので、今のカテゴリーには当てはまらない。彼は、鶏の冷凍実験など哲学だけではなく知的探究心が旺盛で、科学の基本的姿勢について大きな影響を与えた人である。

この本では科学者の立場から人間が陥りやすい偏見の原因をイドラと呼び4つに類型化しているので簡単に解説しよう。

種族のイドラ…感情や感覚における錯覚であり、肉体を持った人間である以上、これに振り回されるであろう。実験機器や研究手法の発達によって解決されたとはいえ、それに価値評価し意味付けを行うのは相変わらず人間である。

洞窟のイドラ…個人的経験や生活環境や習慣、教育によって生じる誤り。狭い洞窟の中から世界を見ているかのように、見える範囲が限られている。にもかかわらず、それが全てであるかのように思ってしまう。研究室に籠ることの危険性である。

市場のイドラ…市場のように人が集まるところで広がる噂などを指し、これらの言葉が思考に及ぼす影響から生じる偏見である。洞窟のイドラと重なるとさらに厄介で、世間知らずの上にデマに翻弄されることになる。

劇場のイドラ…伝統や権威のある思想家たちの思想や学説を絶対正しいもの
だと思ひ込んでしまうことに起因する誤り。思想家たちの舞台の上のドラマ
に眩惑され、事実を見誤ってしまうこと。学界で華々しく取り上げられる学
説に惑わされるなどということである。

この4つのイドラを取り除いて初めて、人は真理にたどり着け、本来の姿を取り
戻すとベーコンは考えた。これはいわゆる文系にしか関係ないと思うことなか
れ。確かに、種族のイドラは人間が直接肉眼で確認する範囲から実験方法や器具
の発達によって、少しはマシになったレベルである。洞窟のイドラは、研究分野
の細分化によって、ますます酷くなっている。自分の分野では、まだ誰も手をつ
けていないことであっても、隣の研究室ではごく当たり前のことだってある。市
場のイドラは、今ではマスコミがそれに相当するであろう。マスコミだって事実
無根の報道をすることもある。それは意図的なものだけではなく、他のイドラと
複雑に絡み合って現われてくる。

そして最も怖いのが劇場のイドラである。これが科学・技術の発展を妨げるこ
とになる。これは、なにも大先生に限らない。自分がある研究で有名になったと
き、学界や産業界から「その研究の人」としてのラベルを貼られてしまう。もし
そうなったとき、途中で間違いに気づいてもそれを素直に撤回できるか？自分の
過ちを公に認めるのは勇気があることだ。もし過ちを認めなかったときは、社会
として大きなコストを払わなければならない。自分のコストを社会に付け替える
ことになる。

彼は学問について述べたが、日常の中でも彼の思考を活かす機会は多分にある。
機会があるとするのではなく、むしろ十分に注意しなければならない。

書かれてから400年経過しても人間の過ちを犯す原因はそんなに変わっていない
ものだと、ある意味感心する。たぶんこれらのイドラは科学に限られず、学問は
日常の延長にしか過ぎないのか？と。たぶん、人間が人間でいる限りイドラから
逃れられないだろう。

学生諸君は既に大学という高等教育を受けているのであるから、世間の動きを

そのまま自分の頭で判断することなく受け入れる大衆であってはならない。少なくともこの4つのイドラが我々の思考を乱すものだとの心構えがあるだけで、真のエリートに近づけるのである。

執筆者紹介

綿引 宣道

経営情報系准教授。専門領域は、経営学、経営社会学。

『書名』 著者名(翻訳者名) 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格
『学問の進歩』 フランシス・ベーコン著 (服部英次郎・多田英次) 岩波文庫
1974年 903円

[ブックガイド目次へ](#)